

の和名はこれをツチガゴケと改称したい。

新属名は榎賀安平先生の名を記念したものである。榎賀先生は長い間三重県の諸学校に教鞭をとられて、同地方の教育界に大きな貢献をされたが、同時に三重県の動植物や地質の研究にも努められて多くの立派な業績を残された。特に蘚類に興味をもって研究され、その成果は「三重県産の蘚類 (A List of Mosses from Mie Prefecture, 1940)」その他の論文として発表されている。現在は郷里の淡路島南淡町に近い三原高等学校の講師をつとめられているが、72才の高齢にもかかわらず、なお若い生徒たちと共に山へ登り、マラソンをやり、また教え子たちから贈られて同高校構内に建設された榎賀研究室で研究にも余念がないといったお元気な活躍ぶりである。

○高等植物分布資料 (4) Materials for the distribution of vascular plants in Japan (4).

○イチゲキスミレ *Viola orientalis* (Maxim.) W. Becker これまで知られていた東限産地は駿河高草山であったが、更に東の駿河天子山、甲斐御坂山にも見つかった。

天子山のものは既に杉本順一氏の「天子山脈の植物」(1954) に田貫沼及び白糸の滝から記録されている。筆者は 1956 年 4 月 29 日に、田貫沼から天子山への登路に当る岐尾根の日当りのよい草地に多生しているのを確認した。同所にはアシタカツツジが生えており、愛鷹山以外の確実な産地である。

御坂山の産地は黒岳附近の尾根上数カ所に少數ずつ生じており、附近はブナ林である。

この産地は、天子岳では尾根のブナ林中には生じておらず、下部の草地にのみ生えている事と比較して興味がある。現在この附近は伐採が進められており、今後うまく生残るかどうかわからない。

本種の分布は中国地方、九州ととび離れており、朝鮮、満洲、支那にも産する。御坂山は日本における東限及び北限である。(金井弘夫)

○ヤマガラシ *Barbarea cochlearifolia* Boiss. 駿河愛鷹山の鋸岳から位牌岳に至る稜線上、高度約 1300m の所に唯一カ所だけ生じている(金井弘夫, Jul. 18, 1954 No. 62 58 TI)。この附近はブナの原生林で、尾根は東西に走り、両側は急峻で、特に南側は旧火口に向って急激に落込んでいる。本種は最も近い所では南アルプスの 2000m 以上の所に生じているのみで、寒冷期の遺存と見られる。個体数は僅かであるから、遠からず見られなくなるのであろう。なおこの種の分布は本州では近江伊吹山以東で、愛鷹山は南限となる。(金井弘夫)

○ホソバジュズネノキ *Damnacanthus lancifolius* (Makino) Koidz. 西日本系の本種は駿河富士郡吉永村桑崎の浅間神社境内に産する。(金井弘夫)

○ ベニバナボロギク *Crassocephalum cf. crepidioides* S. Moore 桧山庫三氏が今年1月号の「野草」に発表されたように、群馬県高崎市の観音山にベニバナボロギクが現れた。里見哲夫氏の1957年9月29日の採集品がそれである。茎、葉の伏毛は多細胞性の単毛であり、頭花は主茎頂に数個あり、更に上部葉腋からの枝に開花前のもの数個を見る。里見氏もラベルに“紅色の花”とノートしており、花柱の形態も *Crassocephalum* に一致する(津山: 植研 31: 159-160 参照)。このアフリカ原産の草は本邦では從来九州と四国とに報告があるが、以東には未報告であった(津山: 植研 30: 123-125 参照)。

(水島正美)

○ ツクシアリドオシラン *Myrmecis tsukusiana* Masam. 筆者らは先年四国剣山の二ノ森付近でアリドオシラン属と思われる植物を少數採集したが、最近それがツクシアリドオシランであることが判明した。本種はかつて正宗巖敬氏が九州の屋久島で採集されているが剣山にも産することを知った。(東丈夫・名越規朗)

○ ホソバウマノスズクサ *Aristolochia Onoei* Franch. et Sav. 従来の文献ではこの植物は相模、紀伊、伊勢など本州中部の産とされており、四国には未だ確実な産地が知られていなかった。筆者らは徳島市入田と剣山の堀離取川～富士ノ池とでこれを採集した。(東丈夫・名越規朗)

○ エゾミツモトソウ *Potentilla norvegica* L. 北海道には知られていたエゾミツモトソウが長野県に見出された。1957年7月7日、藤沢正平氏(下水内郡飯山小学校に在勤)が採集されたものであり、場所は下高井郡志賀高原の幕岩附近(約1500m)である。本州初見と思うので、此所に報告する。

本種は北中部ヨーロッパからコーカサスを通って蒙古、ウスリー、カムチャッカに至り、本邦に隣接の地域では朝鮮と樺太とに分布する。邦内では上記の如く北海道に知られるのみであったが、今回信州北部を加えた。少くとも樺太と北海道では牧場、村落、市街地と云った所に生ずるので、“日本産のものは眞の自生か否かに疑いがある”(原: 欧米種と近縁な日本植物の変異の研究、其の1、1952)。多分“牧草種子に混じて輸入されたものであろう”(宮部・三宅: 樺太植物志、1915)。志賀高原も此の地に遊ぶ人々が多い、然し此所のエゾミツモトソウは自生ではなかろうか? 信州の東西両翼の地に其の産を知られていないことは、信州に隔離分布をする東亜大陸北部の要素に加うべき種類ではあるまいか? と小生に考えさせるのである。(水島正美)